

REPORT @KCUA

ISSN 2435-6018



2021-2022

Table of Contents

目次

展覧会 | Exhibitions

15 特別展 | Special Exhibitions

75 申請展 | KCUA Open Call Exhibitions

92 アウトリーチ | Outreach

94 印刷物 | Printed matter

96 刊行物 | Publications

100 @KCUAについて | About @KCUA

102 運営委員会 | Steering Committee

COVER PICTURES

mamoru

「おそらくこれは展示ではない（としたら、何だ？）」

〔アーカイヴ〕に触発される思索を体現するという問いからはじまったこのプロジェクトは、想像を喚起する言葉やイメージ、そして歴史の中に埋もれてしまった小さな出来事に意識を向けて、全感覚を傾けそれを聴き、探究するアーティストのmamoruを含む6人の「プレイヤー」の「プレイ」によって、展覧会場と特設ウェブサイトの2箇所にて、phase 0, 1, 2, 3の4段階で展開していきました。展覧会としての会期が終了してからも、プロジェクトのアーカイヴについて考える「プレイヤー」の「プレイ」は続き、「何だ？」についてさらに思索をめぐらせ続けました。そして、2022年10月4日に本？／ウェブアーカイヴ／アルバム、と複数形式のアーカイヴがローンチされました。

(pp. 45–64)

イラスト：松元 悠

凡例

- ・ 肩書きは2021年度当時のものを記載
- ・ 特に会場名の明記のないものは京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA にて実施
- ・ All exhibitions and events were held at Kyoto City University of Arts Art Gallery @KCUA unless otherwise noted.

REPORT @KCUA 2021–2022



KYOTO EXPERIMENT との協働事業として、パフォーマンスから映像、デザイン、ファッション、電子音楽、宗教まで、ジャンルやメディアを自由に横断する中国ミレニアル世代の旗手、チェン・ティエンジュオによる日本での初個展を開催しました。チェンの作品制作の過程において、パフォーマンスはのちに独立した映像作品へと発展を遂げ、それをさらに彫刻や絵画、空間と融合させることで、新たなパフォーマンスの舞台を生み出し、創造的で有機的な進化を重ねています。本展のタイトルである「牧羊人」(ムーヤンレン)は、中国語で「羊飼ひ」を意味し、多くの宗教において「失われた魂の探究」を意味するメタファーであり、転じて精神的変容の出発点を象徴します。チベット系仏教の信者であり、現代のクラブカルチャーにも精通するチェンの手によって、神秘的な宗教儀式とレイブパーティが混淆したような祝祭的空間が演出されました。最新の映像作品《The Dust》にもとづいたパフォーマティブなインスタレーションのほか、旧作の《TRANCE》や《ISHVARA》、《An Atypical Brain

Damage》なども紹介し、キツチュでクイア、そして恍惚に満ちたチェンの精神世界へ多面的に接近する貴重な機会となりました。

2021年10月5日(火)~10月31日(日)
KYOTO EXPERIMENT 2021 AUTUMN
チェン・ティエンジュオ「牧羊人」

展示室：@KCUA 1, 2, Gallery B, C
開催日数：24日間
入場者数：1,394人
企画：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学
ギャラリー @KCUA
制作：partner in crime
主催：KYOTO EXPERIMENT、京都市立芸術大学

関連イベント

- ・10月1日(金) 16:00~20:00
ニューイ・ブランシュのための展覧会特別プレビュー
- ・10月2日(土) 16:00~19:00
ライブパフォーマンス
出演：Eartaker, Prettybwoy,
Violent Magic Orchestra
- ・10月3日(日) 16:00~19:00
ライブパフォーマンス
出演：Mars 89, Violet Magic Orchestra,
¥0USUK ¥UK1MATSU

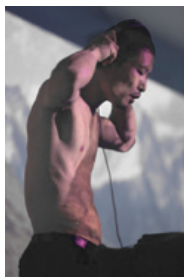
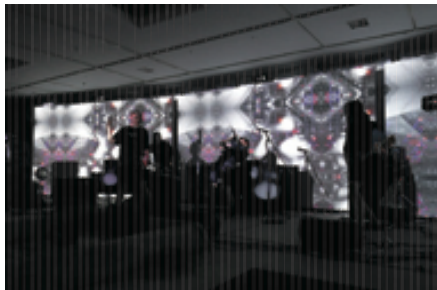
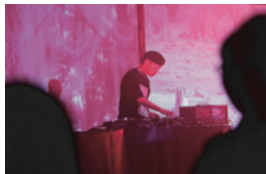


写真 来田 猛 (展示)、前谷 開 (パフォーマンス) / 提供: KYOTO EXPERIMENT
Photos by Takeru Koroda (Exhibition), Kai Maetani (Performance, courtesy of KYOTO EXPERIMENT)

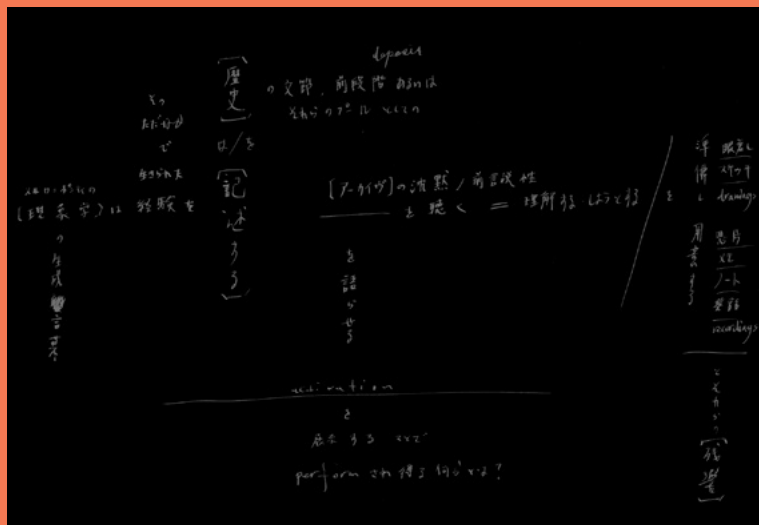
「おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ?)」
mamoru: THIS probably IS NOT AN EXHIBITION (then otherwise what?)

mamoru、池田精堂、仲村健太郎、小林加代子、松本久木、藤田瑞穂
mamoru, Mizuho Fujita, Seido Ikeda, Kayoko Kobayashi, Hisaki Matsumoto, Kentaro Nakamura

phase 0: 2021.12.11 Sat.-12.26 Sun.
phase 1, 2, 3: 2022.1.4 Tue.-3.21 Mon.

2023年のキャンパス移転に向け、京都市立芸術大学（京都芸大）では、本学独自の「知と創造のありか」を探求し、教育・研究・創造の連携を図るための議論を進めています。@KCUAでは、本学芸術資料館が有する芸術資料を新たな視点から調査・研究・活用することを目指した実験的な展覧会に取り組んできました。それらの展覧会で試みてきた芸術資料の「活用」に共通するのは、資料が収蔵されてから現在に至るまでの、収蔵品の背景にある／あった物事を推察し、そこから新たな語りのあり方を探ろうとする姿勢です。2021年度は、想像を喚起する言葉やイメージ、そして歴史の中に埋もれてしまった小さな出来事に意識を向け、全感覚を傾けそれを聴き、探究するアーティストのmamoruと協働し、〔アーカイヴ〕の声を聴き、考察するためのプロジェクトを立ち上げました。3ヶ月にわたって続くこのプロジェクトは、展覧会場と特設ウェブサイトの2箇所にてmamoruを含む6人の「プレイヤー」の「プレイ」によって、phase 0, 1, 2, 3の4段階で展開していきました。

mamoru 《思索の地図》 202012



「おそらくこれは展示ではない（としたら、何だ?）」
プレイヤー：

mamoru：今回のプロジェクトの発案者。プロジェクトの発信源となるハイパーテキストの執筆者。そのテキストは転じて各プレイヤーに向けた投げかけでもあり、時にはスコア的なものにもなっているので、いわばコンポーザー的バンドリーダー的な役割のプレイヤー（相当な部分が各プレイヤーにゆだねられているため、プロジェクトを「私の作品」のように考えていない）。2階のシアタールームの映像出品者。

池田精堂：会場を舞台に設営作業＝展示技術を用いたパフォーマンスを行う。
仲村健太郎、小林加代子（Studio Kentaro Nakamura）：特設ウェブサイトならびに関連資料のデザインを担当。
松本久木（有限会社松本工房）：「第十門第四類」のプレイヤーならびに@KCUA会場のビジュアルデザインを担当。
藤田瑞穂（@KCUA）：「第十門第四類」構成、各フェーズでの変化に伴ってアップされるテキストと記録、プロジェクトの企画・運営を担当。

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展

「第十門第四類」

（mamoru「おそらくこれは展示ではない（としたら、何だ?）」phase 0）

University Art Museum, Kyoto City University of Arts Collection Exhibition:

No. 10-4

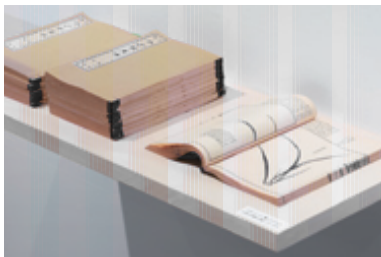
（mamoru: THIS probably IS NOT AN EXHIBITION (then otherwise what?) phase 0)

池田雲樵、今尾景年、幸野煤嶺、巨勢小石、鈴木松年、竹内栖鳳、谷口香嶠、原在泉、mamoru、望月玉泉、山元春挙
Zaisen Hara, Unsho Ikeda, Keinen Imao, Bairei Kono, Shoseki Kose, mamoru, Gyokusen Mochizuki, Shonen Suzuki, Seicho Takeuchi,
Kokyo Taniguchi, Shunkyo Yamamoto

2021.12.11 Sat.–12.26 Sun.

プロジェクトの初手となる「phase 0」では、芸術資料館収蔵品活用展「第十門第四類」として本学所蔵資料の展示を行いました。「第十門第四類」とは、本展で取り上げた、明治期から続く図書台帳の「第十門」（粉本類）の「第四類」として分類された写生用手本画を指します。学校の創立当初、教材として活躍したこれらの手本画は、教育方針の変化とともに実用されることが少なくなり、第二次世界大戦後の昭和26年の再分類時には図書台帳から「割愛」されます。やがて昭和57年に所蔵資料の再整理が始まると「第十門第四類」を含む非現用資料も博物館資料として登録され、歴史を考察する上での研究対象となってその価値、役割が変化していきました。「第十門第四類」では、これら資料にまつわるエピソードを、mamoruが本プロジェクトのために制作した〈思索の地図〉（p.46参照）にある、〔歴史〕を〔記述〕しようとするために〔アーカイヴ〕を〔聴く〕という行為のある一つの形だと捉え、資料とその保存の歴史に着目しました。

展示室には、これから起こる何かを示唆するように、収蔵品以外に1点、mamoruの自宅の天井からやってきた紙飛行機を絵手本の上空に設置しました。



2階の展示室 (@KCUA 2) では、mamoru による自作・改造楽器、ループペダルなどの機材を用いた即興演奏の記録映像「おとづれ」(2007年6月9日七針(東京)、9月15日Bank Art NYK hall(神奈川))とスコアやカードなどの資料(つまりmamoru自身の「アーカイヴ」)を、収蔵品とともに展示しました。

また、phase 0 開幕と同時に、特設ウェブサイト(担当プレイヤー: 仲村健太郎、小林加代子(Studio Kentaro Nakamura))では、mamoru が自ら「グルーヴ体」と呼ぶ文章の独特のリズムがウェブ上に表現され、ハイパーテキストによって注釈、脱線、連想が交差しはじめました。



おそらくこれはスケジュールであり、スコアでもある(のか?) / mamoru
(2022年3月1日アップデート版)

phase (0以前から) 0 (から1へ) 414-

京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展「第十門第四類」を引き継ぐ(とは?) 準備として、

- ・ 12月11日以降: 展示空間には「プロジェクト開始前」という胎動が持ち込まれ、その実プロジェクトは(とっくの前から、つまりphase 0以前が存在する)開始されていて、0から1へと向かっているから、その間に得た(る)考察、本プロジェクトを体現する方法・技法に関する思索、実験を起点にしたハイパーテキストをマテリアルにWeb空間の試験運用、それを経つさらにphase 1へと向かう様がしれっと公開される。

phase (0以前から) 1 (から2へ) 438-

前のphaseで進め、深めた考察と、様々な資料やリサーチを通じ、過去のある場面における音風景を再生するなどしてきた「THE WAY I HEAR」シリーズ、を通じて取り組んできた想像で行うリスニング、を生み出す音的な記述、に関する考察を起点に、特に各プレイヤー間におこっているインタープレイとフィードバックの記録をどうするのかという点に留保しつつ、

- ・ 1月4日(第一火曜日): mamoruよりハイパーテキストがGoogleドキュメントにアップされ、現時点以前のphase中のやりとりなどを受けた上でのプロジェクト・アップデートがアナウンスされる。空間が再公開され、1月11日の設営作業に関する発表がある。
- ・ 1月11日(テキストアップ後の@KCUA休館日): 設営作業を実施する。他のプレイヤーの作業も上の期日を目安にすすめる。

* 実作業が間に合わない場合は、少なくとも各プレイヤーはそのリアクションと今後試そうと思ったことと意図などを共有する。

- ・ 1月12日以降: 変化した空間を受け、各プレイヤーからフィードバックがあり、次のphaseに関する方向性あるいは予感が交換・醸成され、随時、空間・紙媒体・Webにアップされることもある。
- ・ phase移行前後にphase (0以前から) 1 (から2) に関してのレポート(https://gallery.kcuu.ac.jp/articles/2022/8246/)がアップされる。



mamoruの〈思索の地図〉(p. 46参照)にある「activationを展示することでperformされうる何かとは?」という問いを手がかりに、mamoruから送られてきた「THE WAY I HEAR」の関連資料に着想を得て、様々な視点からの記録(Aの視点から、Bの視点から、あるいはAとBの両方によって残された、あるものに関する記述。一つの物事を異なった視点から記録したもの)ならびにモノの軌跡についてのメモを作成し、空間にプレイヤーの思考を「アーカイヴ」することを試みました。そして――

ああ、そうか
そうだったんだ
そうそうそう

おもむろに
あるいは勝手に
私は

理解した
そうだ
これは

とうもろこしの桂剥きを知ったことで
わたしの発想が変化し
生まれた

橙（だいだい）の種を
さささっ!と
取ってしまう方法

学ぶとはそういうことだ
勝手に
やっちゃうんだ



絵手本にも同じ様なことが言えるだろう(か?)
絵手本の作者にとっては
そこに描かれた内容を描くことが

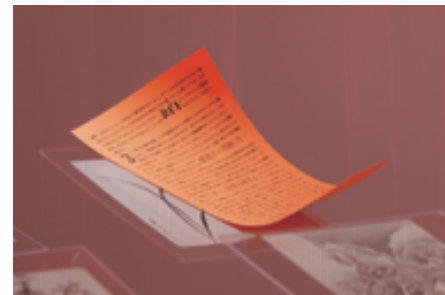
そもそもの目的ではなかった(はず?) →
描かれた内容を誰かが真似て描くこと →
そのことを通じて生まれる経験的な理解👉

を経て、別の何かを生み出すこと

それが目的?
つまりさ
お手本は道なの（かもしれない）

道ってたどっていくと →
道の先へと通じていって →
どこか別の場所へ出るじゃない?👉

それってとうもろこしを桂剥く時にも言える
ことで →
と言いつつ、はっきりとは言えないけど →
これは何かのPART1（だと思っんですよ）👉





橙（だいたい）の種のことだけではない→
 と言いつつ、はっきりとは言えないけど→
 紛れもなくまだ終わってない感じがしているから→

そう、思考は続く→
 THANKS FOR TUNING IN→
 アー、アー、アー♪

アーカイヴよ→
 俺の話は→
 お前となんらの関係もないかのようだ…
 が♪



どうだろう?→
 アーカイヴよ→

お前は経験を残すことができるか?
 お前は経験を生み出すことができるか?
 お前は経験を伝えることができるか?

一人の人間のライフスパンを超えて?
 いや、
 わたしが問うているのは
 アーカイヴではなく
 もう少し還元された「記述」に対してか?
 という気もする



どうだろう?
 記述よ

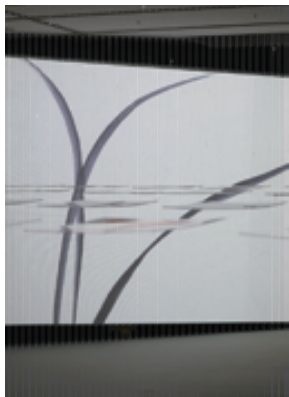
お前は経験を残すことができるか?
 お前は経験を生み出すことができるか?
 お前は経験を伝えることができるか?

（mamoru「20220108_とうもろこしの桂剥きにしたものを食った経験が橙（だいたい）の種をささって取ってしまう方法を生んだ」より）

phase (o以前から) 2 (から3へ) 467-

前のphaseから続く思索、試作、思考、試行、錯誤、実験、考察を起点にしつつ、実現・実装にいたっていないアイデアをなんとかして、空間、紙媒体、Webに反映させることを目標に、

- ・ 2月1日 (第一火曜日): mamoruよりハイパーテキストがGoogleドキュメントにアップされ、プロジェクト・アップデートが伝達されるかもしれないが、必ずしもハイパーテキストのアップデート版が公開され、2月7日の設営作業に関する発表があるわけではない。
- ・ 2月7日 (テキストアップ後の@KCUA休館日): 設営作業を実施する。
- ・ 2月8日以降: 一連の変化を受け、各プレイヤーからフィードバックがあり、次のphaseに関する方向性あるいは予感が交換・醸成され、随時、空間・紙媒体・Webにアップされる。
- ・ phase移行前後に phase (o以前から) 2 (から3) に関してのレポート (<https://gallery.kcuu.ac.jp/articles/2022/8321/>) がアップされる。



「橙 (だいたい) 以下省略」に現れた何か、

この場合は「とうもろこし以下省略」に代表される

「何かしらを剥く方法」という

無形文化的なもの、が

「わたしは生きてきた」のひとつの発露であって、

芋づる式に、あるいは、原形追跡不可能なレベルで

あれやこれやの経験などが、一体化し、混在している、

リアル。

いやこれもう、当たり前なんですけどね、でも何かひっ

かかるんですよ、

もうちょっと掘り下げたら何かありそうなのになーっていう

そういうときあるじゃないですか？

そういうやつです、いま。

それで、何が言いたいかというと・・・

影響とインスピレーションの速度の違いっていうか・・・

そもそも影響もインスピレーションも受けてありきなので、

そこもまた考えに含めないといけないんですよ。

何かを残すときに、それが何であるか、何だと思われるのか

それがどのくらいの速度をもったものなのか、

規定できない

と思うんですけどね・・・

(mamoru「20220124_影響とインスピレーションの速度の違い」より)

phase (o以前から) 3 (からだこへ?) 494-

今回のプロジェクトは「何(だったん)だ?」と、最終的な考察をしつこく行う、が(あるいはそれによって)極力、断定的な振る舞いは回避、保留され、結論はどこまでも先送りされることが告げられる(んじゃないかと現時点では思っている)、だろうという考察を起点に、しつつ、当初、

・3月15-21日(プロジェクト最終週):ハイパーテキスト、空間(も適宜)の両方が日々アップデートを行うかもしれない。ひょっとすると現場にmamoruが入り、滞在するのだろうか? 関連動画はどんどんアップされ? 積極的に公開される?(としたら、何だ?)

としていたが、むしろmamoruはテキスト各種を3月1-7日に書き上げ、プレイヤー達と共有し、そこから何かが生まれるかもしれない最低限の時間を確保することを目指すということ。また3月7日前後に、@KCUAの1,2階展示室空間、特設Webサイト、紙媒体の全てがアップデートされるだろうこと。また、非公開ではあるが3月14日の休館日に全プレイヤーが@KCUAの空間に集合し様々なフィードバックがなされ、その様子が撮影されるだろうこと。14日の全プレイヤーミーティングの際に新たな動きがあるかもしれない、とは思いつつも、余程ことが無い限りは最後の1週間ほどはこのプロジェクトの余韻を響かせようと思っている、のでmamoruが滞在したり動画のアップはないだろうな、ということ。そしてやはり

・3月21日(プロジェクト最終日)以降:全くの未定、ということだけは決定している。



糸を縫う針のごとく・・・

phaseからphaseへと広がる水面

揺き分け進むこのテキストの

刻むその航路

は、エフェメラルな

空の轍

糸を縫う針のごとく・・・

結論は先送り

垣間見えるのはただの動き

かなり

アーカイヴには捉え難き

問いに問いかける、

空の空

いっさいは空？

で、割愛される？

と、軌跡はない？

予定通りに調和されはしない

じゃあパフォーマンスとは定義できない？

そうは言ってもパフォーマンスではないとも

言い切れない？

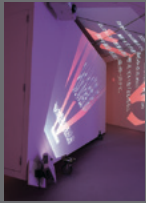
としたら、何だ？

と、逆照射

する、複数の意図が交差

し、プレイする果てに、

それぞれがノブを捻るEQ



高音域

中音域

低音域

少しずつずらし

ピントを合わし

見えない音像を捉えようとし

版を重ね

ながら、そもそも何にフォーカスするのかね？

と、さらに絞り疑う

ことを繰り返し

振り出しに戻し

留保する

のは、牛歩する

ある種の戦術でもある

断定を避ける

ことで、自らを開き続ける

ことで生まれ得る

メビウスの輪

的な、この種の円環は

ぐるぐると反芻

する、うちに、傾く

ただただ

想像は

可能だ

そうだ

それは

ありそうだ

と、(おそらく)

万感の想いを

込めた

ラスト・フライト

を、君は見たんじゃないか？

あるいはその響きを

どこかで聴いた

の、だろうか？

おそらくこれは展示ではない(としたら、何だ？)

と、ある朱に染まった

意図を

問う

間に

は

は

むしろ

逆(説)に飛ぶ？

の、だろうか？

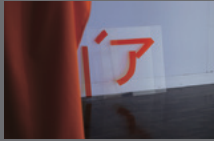
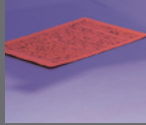
と、想い巡らしながら

アイデアや理解なんてものは

いつも遅れてやってくるんだ

と、つぶやきながら

三月をむかえる、今



(mamoru「20220227_糸を縫う針」projection text」より)

また

アップデート

「何だ？」をめぐる、終わることのない思索

——phase [からだこへ | 記録／先送り]

はじまりがあるものには必ず終わりがある、というのが世の定説。さて、このテキストを書いている2023年3月現在、はたしてこのプロジェクトは「終わった」のだろうか？ 会期は約1年前に終了し、その後の約半年にわたって、なぜか毎回どうしても2時間以上かかってしまうオンラインミーティングを重ね、2022年10月14日、プロジェクトの【記録】としての「リアル系アーカイヴ」（『おそらくこれはアーカイヴにはなり得ない（かもしれないが…そうとも言い切れない？）』としたら、何だ？ phase [記録／先送り]」、通称：「オイル本」、詳細はp.99）」と「Web系アーカイヴ（<https://gallery.kcuu.ac.jp/mamoru/>）」の公開に至った。普通に考えて、プロジェクトとしてはいったん完了した体を成している。しかし「プレイヤー」たちによるFacebook Messengerのグループチャットは未だ途切れることなく続いている。それはプロジェクトの残響なのか、あるいはまだ完全に終わってはいないのか。そもそも、完全に終わる、とはどういうことなのだろう？ そんなことを考えてはまた思索の森に迷い込む。……なるほど。このプロジェクトに端を発するいくつもの「何だ？」について考えるのをやめない限りは終わらない、あるいは終わった気になれないのかもしれない。

「ん？ これ何だ？」とA事象に対して思ったときにわたしはA事象に対して生まれる。（ちなみに「あーこれね」と言う反応の場合わたしには変化がなく何も生まれない、あるいはすでに生まれていただけの話。）それに対してA事象をスルーし「ん？ これ何だ？」と思わなかった人がいたとすれば、その人はA事象に対しては生まれていない。だとすれば当然わたしはA事象に関してその人にアクセスできない、というか断絶があることは致し方ない。これが世に言う「考えれば考えるほど孤独になる」だ。Aと簡単に言っただけのAに近似したA1やA2'やAnというバリエーションで微細な差異を考えると、「何だ？」はいつだって絶妙に入り組んだルートをたどり、後の祭り、そこは孤高なゾーンとなり、いやが応にも到達してしまう袋小路。

正確には疑問を持たず持っただけ「わたし」が生まれ、生まれまくるのでその成長やら死やらその数だけ面倒見なくてはいけい。そう面倒なんだよ「何だ？」は。

（mamoru『20220623_何だ?続編』より。2023年3月時点では未公開（会期後に書かれたため？ Web系アーカイヴ未収録であることを2023年3月6日に筆者発見））

2020年10月、mamoruに「京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展」とは「大学が持つ芸術資源（有形無形問わず）はどのように活用可能なかを考えるためのシリーズで、極端に言うとして持ってくるものは1点でも成立する」と説明したことからこのプロジェクトははじまった（それから2年半が経とうとしている現在は、1点どころか概念のみで物理的な収蔵品はなくても成立するんじゃないか、とすら思っている）。このことについて、後にmamoruは「『大学が持つ芸術資源』のより無形なものであると思われる「やってみる」みたいな大学が本来もっている「お仕事チェックな“置きに行く”行為ではない」教育機関ならではのバッファを最大限に活かすことが下敷きになった末に（彼女は「第十門第四類」を作り出すプロジェクトの主要な一人のプレイヤーとなり、他のプレイヤーも加わり）今回のプロジェ

クトが「おそらく・・・」生まれたのだと思うとすでに感慨深い」（mamoru『20211011_おそらくこれは展示ではない（としたら、何だ？）_共有』注1-1）と振り返っている。

本学の収蔵品に限らず、古今東西のさまざまなアーカイヴは、何かのものととの記録や痕跡として残されたものである。時とともに失われてしまったもの、人々の記憶からすっかり消えてしまったものも星の数ほどあったはずだ。私たちがいま目にすることができるのは、そうしたなかで失われることなく蓄積され、現在に至るまで保存されてきたものだけである。そして、それらも、あくまで過去のものとに関する何らかの断片でしかない。どのように読み解こうとも、時空を超えて、それらが「生きていた」頃と同じように経験を得ることはできない。しかし、もしその記録から何かを感じ取り、そこからつながる別の何かについて思索を深めたりすることは可能だ。そうすればアーカイヴは、そこから派生した何かとともにいまの時代に接続され、新たな経験を生みだすものになり得る。

私は、こうした一連の行為そのものが、アーカイヴの「活用」に重要な要素の一つだと考えている。「活」とは、「勢いよく動く、生き生きしている」こと、「生きる、暮らす」こと、「動きを殺さないで役立てる」ことなどを意味する文字だ。「何だ？」からはじまる思索と、それを体現しようとするための実験、その過程の試行錯誤——それはまさにこのプロジェクトでずっとやってきたことである。そして会期が終わってもなお「何だ？」は連鎖的にとめどなく発生し、「アイデアや理解なんてものはいつも遅れてやってくる（p.61参照）」がゆえに新たな発見も続く。そ

して「プレイヤー」たちは、この実験の結論を未来に先送りすべく、「オイル本」と「Web系アーカイヴ」をプロジェクトのphase [記録／先送り]として世に放ったのだった。

たとえ「プレイヤー」たち自身の探求が何らかの理由で停止したとしても、他の誰かが何らかの形でそれらを受け止めて、また何か動きはじめるかもしれない。つまり、必ずしも終わりがあるとは限らない、というわけだ。発生し続ける「何だ？」に思索をめぐるらせんphase [記録／先送り]は、世の定説をも覆すかもしれない？ という希望に、きっと満ちている。

* 経緯については『おそらくこれはアーカイヴにはなり得ない（かもしれないが…そうとも言い切れない？）』としたら、何だ？ phase [記録／先送り]』の構成要素の一部である「ご依頼書」に詳細に記されている。それ以降、これまでの主要な動きは以下の通り。

- ・「Web系アーカイヴ」が東京TDC2023に入選。
- ・松本工房オンラインショップにて「オイル本」のやたら熱のこもった委託販売ページ（<http://shop.matsumotokobo.com/?pid=173071545>）が始動。
- ・2022年10月14日に行われた「オイル本」とWeb系アーカイヴの公開を記念したトークイベントの記録映像（<https://vimeo.com/800238824>）を公開。
- ・2020年度の京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展からこのプロジェクトまでを論じた拙論「バンデミック後のイメージの行方——「静のアーカイブ」から「動的イメージ」へ」を所収（pp.310–357）した『拡張するイメージ——人類学とアートの境界なき探究』（藤田瑞穂、川瀬悠、村津蘭編、重紀書房、2023年）刊行。

それから……？

（藤田瑞穂／@KCUAチーフキュレーター／プログラムディレクター）

2021年12月11日(土)~12月26日(日)
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵品活用展
「第十門第四類」
mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたり、何
だ?)」phase 0

展示室: @KCUA 1, 2
開催日数: 14日間
入場者数: 409人
企画: 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催: 京都市立芸術大学
助成: 公益財団法人野村財団
(mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」)



2022年1月4日(火)~3月21日(月・祝)
mamoru
「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」
展示室: @KCUA 1, 2
開催日数: 67日間
入場者数: 1390人
企画: 京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
主催: 京都市立芸術大学
助成: 公益財団法人野村財団
(mamoru「おそらくこれは展示ではない(としたり、何だ?)」)

関連イベント

- ・2022年7月7日(木) 18:00~19:00
公開アーカイビング「おそらくこれはアーカイブ
にはなり得ない(かもしれないが...そうとも言い切れない?)
としたり、何だ?」
出演: mamoru
- ・2022年10月14日(金) 18:00~19:00
「おそらくこれはアーカイブにはなり得ない(かもし
れないが...そうとも言い切れない?)としたり、何だ?」
ローンチ記念トークイベント
出演: mamoru、池田精堂、小林加代子、
仲村健太郎、藤田瑞穂、松本久木

写真 来田 猛
Photos by Takeru Koroda

京芸 transmit program 2021 *KCUA Transmit Program 2021*

大槻拓矢、岡本 秀、北浦雄大、棒立ち
Yudai Kitaura, Shu Okamoto, Takuya Otsuki, Bodachi



2021.4.17 Sat.-7.11 Sun.

(新型コロナウイルス感染拡大予防の観点から2021年4月25日(日)~5月31日(月)まで臨時休館。展示室変更のため6月7日(日)~11日(金)まで非公開)

<https://gallery.kcua.ac.jp>

